ある戦友の死

●永福二丁目
後藤　重三郎
（大正一四年生まれ）

「朝鮮半島へきましたから、アリランの歌を朝鮮語で歌います」

Sという大柄な兵士が立上って、みごとなテノールでアリランの歌を歌い始めた。昭和二〇年三月下旬のある日、朝鮮半島北部の羅新港を見下ろす山の上であった。

私たち関東軍野戦重砲第二連隊の初年兵は激しい演習の休憩中に、教官の准尉に指名されて次々に歌わされていた。

すばらしいテノールを聞かせた彼は、慶応大学予科出身の学徒兵で、私とは仲の良い戦友であった。哀愁を帯びた彼の歌声は私たちの胸にしみ込むように、朝鮮の山野を流れていった。

敗色はすでに濃かった。私たちは繰り上げ召集で、一九歳で軍隊に召集され、学業を投げうって中国大陸に渡り、ソビエトとの国境線に布陣する関東軍の野戦重砲三七六五部隊に編入されていた。

満州の厳寒期も過ぎる三月中旬、突如として国境守備の私たちの連隊に動員令が下達された。南方第一線に出陣せよという命令であった。

当時は海を渡ることは死を意味していた。遺書を書き、遺髪を置いて私たちは死出の旅路に出た。そして朝鮮半島北部の港で乗船を待って日夜猛訓練を受けていた。

眼下には暗い日本海が拡がっていた。あの彼方に懐しい祖国がある。アリランの歌の哀調に誰もが郷里を思い、明日の命もわからない自分たちの運命を思って、やるせない郷愁に耐えかねていた。

数日後、私たちは夕暮れの日本海を単船で、護衛艦もなくアメリカ潜水艦の目を逃れて必死で進む輸送船の上にいた。行先は極秘であったが、沖縄だろうという噂であった。

その船首のあたりに寒風にさらされて一人ぽつんと立って、暮れてゆく蒼茫（そうぼう）とした日本海を眺めている彼を発見した。

「おい、元気がないな。どうした」

声をかけた私をふり返った彼は無言で口をあけて見せた。のぞき込んだ私はぎょっとした。彼の口の中は白い皮で被われたように変色していた。

「なんだ。これはジフテリアじゃないか」
子供のころ罹病した経験のある私はびっくりしていうと、
「苦しい、軍医は船の中ではどうにもならんから我慢しろというだけで見捨てられたよ。見殺しにされて、死ぬのかな」
と、かすれた声でいうと彼は弱々しく笑った。ジフテリアはワクチン注射を早く打たなければ絶対に助からない。
「頑張れ、注射一本ですぐ治るよ」
と励まして別れたが、彼は船の中で放置されて刻々と弱っていったようだ。アメリカの潜水艦に追い回されて、数日後ようやく新潟港へ逃げ込んだ船から、彼はたんかで運び出されていったが、かけ寄った私にも彼はもう声も出す元気もなく、黙って手を握り締めただけであった。それから一週間程して、彼が新潟の病院で死亡したという連絡があった。
彼は私たちの部隊の戦病死第一号であった。あまりにも早い死であった。もしも平和な時代なら、誰がジフテリアなどで死ぬだろうか。咽喉が冒されて、吸吸困難になって窒息死してゆく恐ろしい死を彼は経験したのである。
元気で、いつも演習の先頭に立っていた彼、そのころはまだ珍しかったアルバイトというドイツ語を皆に教えてくれた彼、兵隊たちが皆大切に肌につけている神社のお守りを、彼は批判して、
「そんな迷信はよせよ。お札一枚で鉄砲だまがよけてくれるかよ。おれはお守りなんか一枚も持たないよ」
といって大声で笑っていた彼は、誰よりも先に逝ってしまった。あのすばらしいテノールのアリランの歌はもう二度とは聞かれない。
もし無事で復員していたら、戦後の日本で彼はどんなにかめざましく活躍したであろうか。この逞しい青年を、戦争は無惨に奪って行った。刻々と死が近づくのに、家族の誰も、戦友の誰も見ていない病院で、たった一人で淋しく彼は死んでいったであろう。
あれからすでに五〇年近くも経過した。今彼を記憶している人は少ない。ご両親もおそらく亡くなられたことであろう。前途有為の人材が、誰にも知られずにひっそりと死んでいった戦争の残酷さを、私はただ一人いつまでも記憶している。
彼のすばらしいテノールを、いつも思い出して、私は平和の大切さをいつまでも多くの青年たちに語り続けてきた。Sよ。安らかに眠ってくれ。私はお前の死をむだにはさせないつもりだ。

北支河北省晋県南智邱の戦闘

●上高井戸一丁目
新川　季吉
（大正七年生まれ）

日増しに寒さ加わりし昭和一五年一一月一八日、夜もまだ明けぬ午前五時、突如として非常呼集、全員中庭に集合する。熊本県出身の分遣隊長K少尉以下一八名、一五分後に朝食を済ませて出動する。月光が冷々と下界を照らす無気味な朝、点呼後隊長は馬上に、南智邱東門より一路東南に行進する。南智邱の守備隊員は、無線一名、炊事二名、歩哨三名、自分は暗号兵なるも人員不足のため尖兵分隊として、U兵長以下五名とともに県警備隊二五名をひきつれ、小隊の前方一五〇メートルを行進する。約四〇分にして部落に到着。

白々と夜も明け始め、野犬の遠吠、ロバの鳴き声で部落内の静けさも破られ、早起きの現地の人の出迎えあり。まず現地の人を部落中央に集めて隊長独自の宣撫をする。更に南東の部落へ約五〇分、宣撫のため部落へ入らんとするや、部落内より我尖兵隊に攻撃あり。小隊は、後方一五〇メートルの所にて部落の左に散開しつつ敵を攻撃する。尖兵分隊は中央にて戦い、二〇分にして戦勝する。久し振りの戦利品の山。負傷者もなく笑顔でそれらを馬車に積み込み、小休止する。その時北北東六〇〇メートルの小高い丘に、新たな敵兵四～五名発見。これをも攻撃せんと、尖兵分隊は小隊の二〇〇メートル前方に進み敵を攻撃するも、敵は一発の発砲もなし。右側と左前方一〇〇メートル先は、二メートル以上の高粱畑で、至る所に深い交通壕があり、無気味そのもの。

突如としてチャルメラの様なラッパの音が高々と鳴り渡る。丘の上の敵兵はおとりであり、それに気を取られている間に二重三重に包囲されていた。ラッパが鳴り終わると同時に四方八方から一斉攻撃を受け、目の前の壕内に夢中でとび込む。我が分隊も壕内より応戦するも、敵兵は三～四千にて、猛攻を受ける。壕上で、『天皇陛下万歳』を叫んで倒れた古参兵の足を持って壕内に引きずり込む。傷は浅いと言ったものの腹部貫通にて出血多し。本人もこれまでと覚悟し、国の母に立派な戦死を伝えてくれと言い残し息絶える。敵は数メートルまでに近づき、最早これまでと思いし時、U分隊長より伝令を命ぜられる。二〇〇メートル以上後方の小隊まで、複雑に枝分かれした交通壕の中を、運を天にまかせて走り続ける。馬蹄を見つけ、その方向に一目散に走り、やっとの思いで小隊長に救援依頼を伝達する。すぐに援軍に向かわんとす

れども、敵は自分を追ってきており、後方より攻撃あり。我が軍も壕内より軽機にて応戦するが、軽機が壕の落土により故障。小隊長は援軍を断念してか、部下とともに部落内に退却。自分も小隊の後へ続き後退。壕の出口の所でS一等兵右手指に軽傷。A上等兵胸部貫通。続いてO一等兵腹部盲貫で倒れる。その後からFと自分が最後に壕上に出る。Oを見殺しには出来ぬと、Fと二人でOの装具を外し、武器弾薬を背にかけ（死んでも武器を敵に渡さぬ教え）Oをかかえ、部落に入るも時すでに遅く、小隊の姿は見えず。部落内からも敵の攻撃を受け、一刻の猶予もなし。小さな農家の庭隅に立掛けてあった高粱の中に入り込み、Oの応急手当をする。左脇腹盲貫にて弾頭がわずかに見えている。

やがて銃声もやみ、無気味な静けさに戻る。我等三人は小隊にも戻れず、再び八路軍の騒がしい会話が聞こえてくる。高粱のすき間から見ると、国防色の軍服姿の正規軍が農民に銃を向けて、日本兵の有無を調べている。自分たちは手榴弾の安全栓を抜き、敵兵諸共自爆せんとする。Oは腹部の激痛のために死を急ぐ。Fは最後の一服と煙草に火をつけようとする。数メートル前には敵兵が家宅捜索しており、煙草をひったくりやめさせる。自分は不思議と心がおちついている。死は目前に迫る。ふと祖国の母の顔が目の前に現れる。無言でにこにこ笑っている。これがまぼろしかと思い、ふと我に帰った時、敵兵もいつか静まり部落掃討を切上げ、隣の部落へ行く。

夕日も沈むころ、自分たちも覚悟を決め高粱内より出る。突然の日本兵の出現に家主も驚く。銃剣をつきつけ八路軍の有無を問うと、ふるえながら北東の部落を指さし、「すぐに戻ってくるので早く南智邱に戻れ」と言う。中国語がよくわからず、また家主をどこまで信用して良いのか。その上南智邱の方角さえ不明。しかし、家主の目の真剣さにうたれ、隣の老婆が厚意でくれた饅頭をほおばりながら、南智邱めざして出発する。お互いに励ましあいながら南智邱城門に九時ごろ到着。城門は堅く閉ざされて、城壁上の県警備隊員に何回も誰何（すいか）され、やっとの事で開門。はやる心で兵舎へ向かい、小隊長に報告せんとするが、未だ小隊長以下戻らず。隊長の愛犬と愛馬のみが戻る。自分は暗号兵故に第三中隊長S中尉宛へウナ電にて発信する。敵兵は三五〇〇以上のため中隊の兵力では不足。大隊本部へも同文発信するが、大隊本部も兵力不足のため、南智邱死守せよとの返信。旅団本部からも同じ返答。

この間、城内の現地の人全員に農器具を持たせて、城壁上に立たせて守らせる。発信後三六時間、援軍の戦車の音が遠くから聞えた時は、本当に嬉しく我に帰った心地。長い長い時間だった。入城とともにまずM旅団長が、よくぞ死守してくれたと一言。帰らざる戦友探索のため、援軍と共に再び戦場へ出発する。二つ目の部落北側にて、小隊長以下十数名の遺体発見。全員南智邱に頭を向け、全裸となり、目はくり抜かれ、耳・鼻は切り取られて、誰が誰やらわからぬ有様。遺体は南智邱にて火葬にされ、長くつらい三日間も終わりとなった。

戦時下の母

●阿佐谷北四丁目
神保　清
（大正七年生まれ）

私は群馬県の山村で、農家の次男坊として生まれ育ちました。そして月日が矢のごとく過ぎ去り、兵隊検査で甲種合格となり、昭和一四年一月一〇日、北支の張家口の部隊へ入営する通知を受け取りました。父は病弱で無理な仕事はできず、母は丈夫で何も言わず黙々と働いていましたが、その当時は不景気で、すべてが配給制度で生活も大変でした。

そして入隊のため、一月四日、我が家を後にする日の朝、平素から両親の胸の中は判かっているので、母には駅まで送ってくれないように、家の庭先で送ってくれればよい……駅まで送ってくれても悲しみが増すばかりでどうすることもできないのでそう伝えた……母は「わかったよ、そうするよ」と悲しみをこらえて「元気でナ」とたった一言……目の奥に涙が光っていた……そして当日庭先で姿が見えなくなるまで手を振っていた。私は嬉しいやら悲しいやら（母も同じ気持だったろう）複雑な気持ちでした。そして高崎の小学校に集合し、夕方列車に乗り下関に到着、船で門司に渡り、そこに二泊して今度は一万二〇〇〇トンの貨物船で、タークーに上陸、列車にて仙化に到着。今度はトラックに乗せられ山西省の霊邱に到着しました。

その晩、敵の夜襲を受け、弾の音にビックリして銃を持って応戦しようとしたら、古年兵に「銃の撃ち方も知らないでどうするんだッ。邪魔だッ。早く寝ろ」と怒鳴られ、毛布を頭から被っていたが、いつの間にか疲れが出て寝ついてしまった。そして次の朝起床ラッパの音で飛び起きた。そして初年兵教育が始まった。それから半年間は無我夢中でした。そして分遣隊の警備、糧秣（りょうまつ）輸送路・橋の警備・討伐にと忙しい日々でした。

わずかの休憩時間中、戦友同士の語らいは、弾の一発を聞いた瞬間、真先に脳裏をかすめるものは母・妻・彼女の順でした。不幸にして敵弾を受け倒れる直前、「お母さん」と一声叫んで逝く。天皇陛下万歳と叫ぶ者は誰一人いなかった。

なお、私の家では長男が上海方面に出征、弟が海軍兵としてフィリピン沖へ、その下の弟も甲種合格でいつ召されるか知れなかったが、幸いにも終戦となり出征しなかった。兄も

私も終戦前に無事帰れたが、弟はレイテの殴り込みで軍艦と共に海の藻屑となり、遺骨も遺品もなく、たった一枚の写真がポツンと入っていただけでした。戦地へ次から次へと子供をとられていく母の気持ちはどんなに傷んだろうか。その当時は男の子は兵隊にとられることが自慢のタネであっただろうが、どんなに気強い母でもやはり女性であり親でもある。きっと一人になれば泣いていただろう、淋しかっただろう。本人以外の者には到底判らないでしょう。

現在は戦争もなく平和そのものである。そして自由がある。こんな幸せな時代は他国にもないでしょう。昔も現在も母親の愛情は変わっていないと思います。世の若者たちよ、心して楽しい家庭を築いて欲しいものである。

八月一四日の兵庫沖

●方南二丁目
鈴木　定雄
（大正元年生まれ）

昭和一九年六月、補充兵として召集を受けた私は、横須賀海兵団に入団した。半月後福島県郡山航空隊へ入り、ここで新兵教育を受けた。長い間、洋服仕立業で生計を立てていた私にとって、新兵教育は大変な労働であった。やがてまた横須賀空技廠（しょう）に戻り、そこの警備につき三か月位をすごした。

その後、海防艦に転勤、九州さえきの海防艦練習所で数か月訓練を受ける。朝四時起床。機関銃の弾詰め等が三時間もつづく。そのころ私の弟にも召集令状が来て、同じく海軍へ入隊したという便りを受け取る。

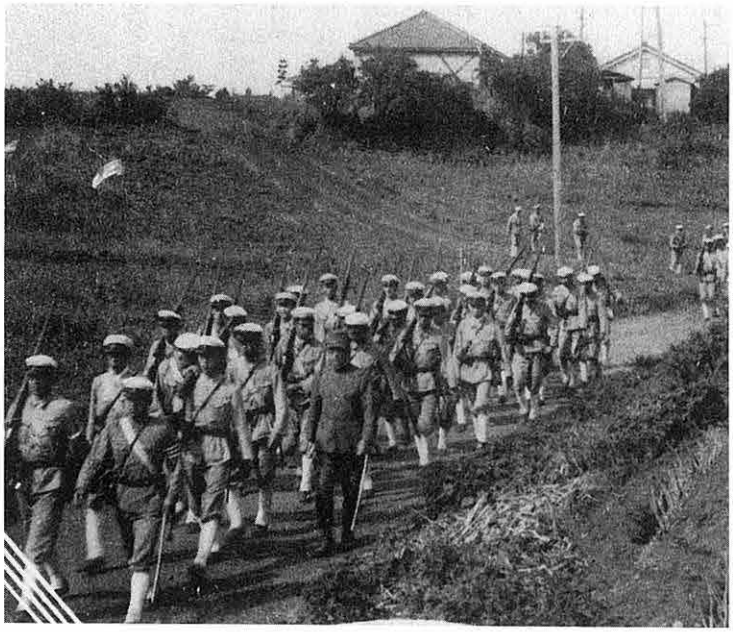
やがて物資輸送を護衛するため、海防艦二隻で小笠原へ向かう途中、鳥島の辺で米軍機から空襲をされ、海防艦一隻を失なう。私の乗っていた船は無事であったが、沈んだ船に乗っていて助けられた人の中には、三日前に乗ったばかりだ、と話していた人もいた。

小笠原、父島、母島にそれぞれ食糧を運ぶ任務を果たし、伊豆に立ち寄り少し休息をとり、南の島から今度は北の果て、北海道の小樽に向かう。海には常に魚雷の危険を感じていた事を後に知る。昭和二〇年一月には一歳六か月の次男が百日ぜきから肺えんをおこし、幼い命を失い、留守宅の苦しみ、悲しみを知らされた。食糧がない、薬がない時代の悲しみは大きかった。

昭和二〇年六月には、舞鶴海兵団に勤務、そして八月一四日舞鶴を出て、兵庫の沖に出たのが午後で、その時突然アメリカ潜水艦から魚雷が発射されて、海防艦二隻はあっというまに沈没の寸前、甲板に見張りに立っていた私たちに命令が出された。海面と甲板がすれすれになった時に海へとび込めという避難命令である。命令にしたがってとびこもうとした私は、何と運悪く防除服のボタンがマットに引っかかって、はずすのに時間がかかり、他の人に遅れて飛び込んだため、海底深く深く吸いこまれてしまった。もう最後かと思った時、船体が一番底についたとたん、私の体はものすごい勢いで浮き上っていった。水面に顔が出た時一面に油が浮いていた。その時下士官が泳ぎながら近づいて来て「おおい鈴木、大丈夫か」と声をかけてくれたので「もうだめだ」と私は答えた。

「待っていろ。今カッターボートを呼んでやるから」といって彼はカッターを呼んでくれたので、私は助かったのである。陸に上って私が見たのは、三十数人の仲間の体が横に並べられていたのである。何ということだ。二四時間後には終戦になったのに、それを知る由もなく命を失ってしまったのである。家族の方々の想いはどうであろう。

私もまた復員してから弟の戦死を知らされた。南太平洋方面ということのみで何も分からない。



巣鴨中学校卒業アルバムより（昭和15年３月）

〈提供　宇田川義久さん〉

もう一つのインパール
北ビルマ戦線

●下高井戸三丁目
太田　保
（大正一一年生まれ）

昭和一九年七月、北部ビルマ（現ミャンマー）は悲惨な戦闘状態であった。不毛のジャングル地帯、補充の兵員も食糧とてなく、容赦なく雨が降りつづくという雨季の最盛期。敵機の連日の銃爆撃で傷つき倒れつつ耐えぬく。ここ北辺の地ミートキーナ周辺では、数か月にわたり死闘が繰り返されていた。

空腹にたえかねあらゆる動植物を食べたが、いかんせん衰弱した身体では受けつけず、栄養失調から五官の機能が麻痺し、思考力も失ない、それに加えて病魔が襲う（マラリア、アメーバ赤痢、脚気、全身に疥癬）。果ては粘液の排便がつづき脱水状態となり、無残にも発狂者が続出する。正に生き地獄である。北辺の雨季は長い。昼と夜の寒暖の差も激しい。近代兵器を駆使する敵軍（英・米・支・印）は容赦なく空、陸から襲って来る。全く補充なき戦闘の哀れさ、悲惨さは言語に絶する。カマインからモガウン、モールに至る道なき泥濘に撤退する敗残の将兵群が列をなしている。化膿した傷口に蛆虫が這いまわっている。よろめきながらただ無言の列、泥と血と汗にまみれた軍衣、うつろな目、歩く亡霊そのものである。道端の物体が突然泥濘の中で呻めく。

「……つれて行ってくれ!!……」振り絞るような悲痛な呻き声、惨憺たる地獄図である。――靖国の亡霊となるなかれ、国には妻子が待っている、このチラシを持って投降せよ、諸君の生命は保証する――敵機からのビラがしきりに散布されてくる。――生キテ虜囚ノ辱シメヲ受ケズ――いまわの際においても（家門ノ恥）が脳裡をかすめるのか、よろよろしたその手にしっかりチラシが握りしめられている。精魂つき果ててもなお投降する意志もない兵隊が自嘲しているようだ。

――戦争じゃけん仕方なか――

伸び放題の髭づらに目だけをぎらつかせ声なき声でつぶやく。明らかに死期がそこに迫っていた。

八月三日、ミートキーナは守備隊長M少将の自決をもって陥落放棄した。

大本営発表

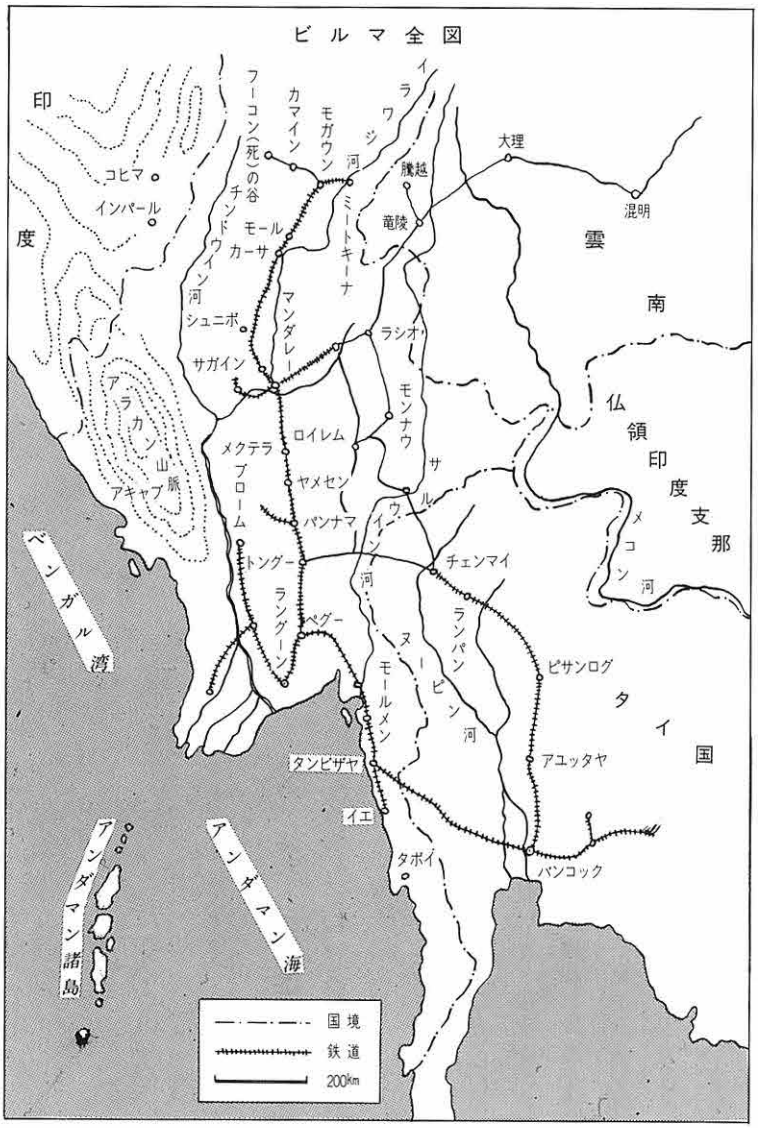
昭和一九年八月一二日一五時三〇分

北部印緬国境附近

フーコン地区より逐次後退せる我が部隊は、モガウン西方ビルマ鉄道北側の要線を占領し、優勢なる敵と相対峙しあり、ミートキーナ守備隊は長期にわたり優勢なる敵の攻撃を撃破しつつありしが八月二、三日両日夜間敵の包囲を突破し後方要点に撤退せり。

……

二〇万とも言われているビルマ戦線の戦没者中、十数万の遺体がいまだに野晒（のざらし）になっているという。共に従軍し、奇蹟の生還を得て半世紀、苦渋と鎮魂の思い切なるものがある。



〈提供　太田　保さん〉